

西中の風

継続と徹底

伊丹市立西中学校長

大西 規之

うれしい便りをいただきました

うれしい便りをいただきました

8月20日(火)に、学校に市内のある小学校の校長先生からうれしい便りが届きました。それはその小学校で2学期に配布予定の学校だよりでした。以下原文をそのまま紹介します。

「休み中にこんなことがありました。家から駅に向かうバスを待っていると、いつもなら、十分空席があるバスが、その日は乗り込むのも一苦労ほど混雑していました。そこには、ユニホームを着た中学生が何十人も乗っていました。私は、「ああ、うるさいバスになるな・・・」と、一瞬いやな気持ちになりましたが、バスが動き出しても、バスの中の生徒たちは、一言もしゃべることなく、静かに立っていました。また、これだけ大勢のバスなのに、優先座席は空いたままなのです。「この中学生はすごいな」と感心して見ていました。ふと、ユニホームに目をやると、伊丹の中学校名が書かれており、サッカー部であることが分かりました。さらに驚いたことは、車内の前の方で生徒全体を見渡している若い顧問の先生は私の教え子でした。私を見て、驚いた様子で私のところへ来て挨拶してくれました」

そうです。この中学校のサッカー部は西中学校だったのです。校内のみならず、校外でもマナーのよさを評価していただきました。たいへんうれしいことです。



次に、甲子園に関する記事からです。

①「大会屈指の右腕奥川恭伸君(3年)ら充実した投手陣を支える星稜(石川)のブルペン捕手、桜井直生君(3年)は、自分のチームに『接戦をものにしてきた勝負強さがある』と胸を張る。昨秋の明治神宮大会、今春の選抜では、試合終盤に逆転され敗れた。『自分たちは強くない』。そんな自覚から『部員全員が日常生活から見直すようになった』と桜井君。練習に加えてゴミ拾いやあいさつを徹底するなどして精神的にも成長し、競り合いを勝ち抜いてきた。『(大会3回戦でサヨナラ3点本塁打を打った)福本陽生君(3年)のように、試合ごとにヒーローが代わる。そんないい状態が続いている。やってくれればいいと思います』」。

※朝日新聞朝刊(2019.8.20)より抜粋

②「フェアプレーが相次いだ今夏の甲子園大会。優勝を逃した星稜(石川)を追いかける中でも、ほほえましいシーンが多かった。

智弁和歌山戦で足をつったエース奥川恭伸投手(3年)に、相手主将の黒川史陽内野手(3年)が攻守交代時に漢方の錠剤を渡したことが話題になった。仙台育英(宮城)戦では同じく投球中に足をつった荻原吟哉投手(2年)の元に相手4番の小濃塁外野手(3年)が駆けつけ、スポーツドリンクを飲ませた。

この機会に星稜名物を紹介したい。自校に練習試合に来てくれた相手を全員で見送る。相手校のバスはグラウンドを出て5分ほどで目の前の高速道路に乗る。丘の上のグラウンドの端から、高速を走るバスが見える。部員全員で並んで待ち構え『ありがとう』を表現するウエーブ。20年以上続く伝統だ。相手校はバスの中で手を振って応えている。星稜側からはほとんど見えないが、ナインは満開の笑顔でバスが見えなくなるまで手を振り続ける。

花咲徳栄(埼玉)の菅原謙伸捕手(3年)が明石商(兵庫)戦で『自分のよけ方が悪かった』と死球を自ら“辞退”したプレーが称賛を受けた。後世に語り継ぎたい光景だった。相手のプレーに拍手を送る高岡商(富山)や、相手への敬意でガッツポーズを一切しない富島(宮崎)のようなチームもやってきた。決勝戦でも履正社(大阪)の主将、野口海音捕手(3年)が走者に出た際、送球の邪魔にならないように腰をかがめ、遊撃手とアイコンタクトする場面があった。

令和最初の甲子園。勝利を追い求めながら、勝利にも勝る価値があることを表現した球児がいた。次の100年への第1歩になる101回大会は、新たな高校野球像を示した大会になった。そう思いたい」。

※ニッカンスポーツ・コム/野球コラム「野球手帳」(2019.8.23)より抜粋

各運動部が新チームになった今、日常生活の見直し、フェアプレーの実践等にぜひ取り組んでください。

日々ホームページを
更新中！！



